

経済と経営 21-3 (1991. 1)

〈論 文〉

E・ベルンシュタインと社会主義の諸問題

堀 川 哲

は じ め に

今日社会主義体制は危機的な状況にあり、全システムの崩壊の過程にある。紛れもなく今我々の眼前において演じられている物語は世界史的な画期点をなしている。こうした変動をうけて、いま様々な分野において社会主義というシステムについて、あるいはそれが持っていた哲学的な理念について根本的な再検討のメスが入られている。本稿ではこうした流れを意識しつつ、19世紀末から今世紀の初頭においてドイツ社会民主党(以下では SPD と略記する)を舞台にして展開された「ベルンシュタイン論争」(あるいは「修正主義論争」)を概観し、この論争の中心に位置するベルンシュタインの思想、とりわけ彼の社会主義論の再構成を試みるものである。この論争は、今日の時点でみても、社会主義とは何かを考えるうえで極めて示唆に富むものであり、アクチュアリティを持っている。しかし、それだけに、評価主体が持つイデオロギーに応じて、論争の整理の仕方も多種多様でありうるし、ここから各人なりの様々な社会主義論あるいはベルンシュタイン像が描かれることであろう。しかし、本稿ではとりあえずはまず、できるだけザッハリヒな視点から、ベルンシュタインの思考の過程を再構成することにしたい。

1. SPD によるマルクス主義の受容とエアフルト綱領

F・エンゲルスは 1895 年の 8 月、ロンドンにおいて 74 年の生涯を閉じ、これと共にマルクス主義の創世期もその幕を下ろす。マルクスやエンゲルスの時代では、全体として、マルクス主義は一個の思想運動の域を出ず、その実際的な運動場面での影響力は微々たるものであった。彼らの祖国であるドイツにおいても、マルクスはラサールやロートヴェルトスとならぶ社会主義者のひとりといった存在以上のものではなく、労働者層の間での人気について言えば、むしろラサールの方が大であったと言えよう。しかし、こうした状況は 1880 年代に入ると劇的な変化をみせるようになる。ビスマルクのいわゆる「社会主義者取締法」（「例外法」とも呼ばれる）は、1878 年から 1890 年まで、ドイツ社会民主党を事実上の非合法状態下におくことになるが、この弾圧の時代にマルクス主義は党内闘争を通じて着実に社会民主党の内部に浸透し、ついには 1891 年の党大会において、マルクス主義を基本理論とする綱領（エアフルト綱領）が採択されるまでになる。

社会民主党がマルクス主義を党の教義として受容するようになる背景としては、通例以下の諸点が指摘されている¹⁾。

まず第一に「社会主義者取締法」が作り出した政治状況である。先にもふれたように、この法律は社会民主党から限定的な選挙戦以外の活動を不可能とし、党を事実上の非合法下におくことになるが、こうした状況下では、普

1) 当時の SPD のイデオロギ―を形成していった思想史的背景の分析については、シュタインベルクの次の研究が最良のものである。H-J. Steinberg; *Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie. Zur Ideologie der Partei vor dem 1. Weltkrieg*. Verlag J. H. Dietz. 4 Aufl. 1976. シュタインベルク『社会主義とドイツ社会民主党』時永淑・堀川哲訳、御茶の水書房、1983 年。

通選挙制度と国家信用による生産協同組合とを思想上の柱とする拉萨ール主義は党内での影響力を弱め、マルクス主義的な「階級国家論」が受容されるための自然的な土壌がつくられていくのである。社会主義者取締法下での党内の空気の変化を示すひとつの事例をあげておこなうならば、例えば、ゴータ綱領（1875年）のなかの「ドイツ社会主義労働者党は、あらゆる合法的な（gesetzlich）手段を用いて、自由国家と社会主義社会のために努力し……」という文章から、「合法的な」という言葉が1880年の党大会で削除され、「あらゆる手段を用いて」という表現に改正されたという事実をあげることができよう。

第二には、経済史上「大不況期」と呼ばれる時代的背景である。これが資本主義崩壊論にリアリティを付与することになる。ベルンシュタインの証言を引いておこなうならば、「彼〔ベーベル〕と私にこの理論〔マルクス主義〕の正しさをとくに強く確信させるようになったのは、1873-74年のドイツの取引所暴落に続いて、ひどい不景気が長く持続したことであった。……70年代後半全体を通じて、不景気はドイツからイギリスに飛火し、さらにフランスをまきこんだ。……〔私も〕ベーベルも……資本主義社会は近い将来にその全面的崩壊を経験することになるだろう、という結論を引き出した。」²⁾

第三には、ダーウィン主義の時代という思想史的な背景。シュタインベルクが強調するところによれば、これがマルクス主義受容の心理的な土台を提供する。彼の手になる詳細な研究が示しているように、進化論は当時のドイツの社会思想に大きな影響力を与え、マルクス主義もまた進化のカテゴリーの下で解釈され、受容されていく。「反キリスト教、反観念論、そして平板な

2) Bernstein ; Entwicklungsgang eines Sozialisten. in : *Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen*. Hrsg. v. F. Meiner. 1924. S. 17. ベルンシュタイン「一社会主義者の発展のあゆみ」（佐瀬昌盛訳、ベルンシュタイン『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』ダイヤモンド社、1974年所収）359頁。

進歩信仰の基礎としてのダーウィン主義はブルジョア層ならびに労働者層の精神的立場を支配した……。ビュッヒャー (Bücher) の『力と物質』 (Kraft und Stoff) は 1902 年から 1904 年までに 21 版をかさね、ヘッケル (Haeckel) の『世界の謎』 (Welträtsel) は 20 年間に 40 万部を売った。……大衆にとっては、ダーウィン主義的な色彩を持った俗流唯物論が『坊主の信仰』や観念論的『気まぐれ』とは対照的な『科学』そのものであるとみなされたのである。……発展 (Entwicklung) それは『魔法の言葉』 (Zauberwort) であり、ダーウィン主義とマルクス学説との神髄として、感受性に富んだ人々を、しかもあらゆるグループ中のそれらの人々を、支配したのであった。マルクス正統派だけでなく、同様に、あらゆるニュアンスをもった非マルクス主義者たちも、発展の原理 (das Prinzip der Entwicklung) を社会主義学説の核心とみなした。」³⁾ ベルンシュタイン自身の証言を引いておこなうならば、マルクス主義を他の社会主義から区別するもの、それは「発展の思想 (Entwicklungsgedanken)、進化の概念 (Evolutionsbegriff)」である⁴⁾。

SPD がマルクス主義を受容することになる基本的な背景としては、この他にも例えば、マルクス派が有能で優秀な人材を有していたことなどが指摘されている。党の最高幹部であり、抜群の組織力を持ち、かつ下部黨員の絶対的な信頼を獲得していた A・ベーベル (1840-1913)、そして若き世代を代表する二人の理論家、K・カウツキー (1854-1938) と E・ベルンシュタイン (1850-1932)、この三名がマルクス主義を受け入れたことは社会民主党のマルクス主義化にとって大きな意味を持つことになった。ベルンシュタインは『ゾツィアールデモクラート』(スイスにおいて非合法的に発行されていた事

3) H-J. Steinberg, *ibid.*, S. 45-46. 訳, 60 頁。

4) Bernstein ; Der Revisionismus in der Sozialdemokratie. Vortrag vom 4. April 1901. in : H. Hirsch (hrsg.) ; *Ein revisionistisches Sozialismusbild*. Verlag J. H. Dietz. 1976. S. 49.

実上の党機関紙、創刊は1879年)の編集を1881年から担当しており、カウツキーは合法的な理論誌『ノイエ・ツァイト』(1883年創刊)を主宰していたが、この両紙は党イデオロギーの形成において強力な役割を果たすことになる。まさに、カウツキーとベルンシュタインとは、ロンドンの老エンゲルスにとっての希望の星であり、「本物の真珠」⁵⁾であった。ちなみに、当時において「マルクス主義を受け入れること」とは『反デューリング論』を受け入れることと同義であった。『反デューリング論』は、その内容の評価はともあれ、マルクス主義を初めて一個の教義体系として提示したものであり、この理論的体系性に対抗しうるものは他の社会主義理論のなかには存在しえなかったのである。この書ははじめ新聞に連載の形式で発表されたものであるが、これが大きな影響力を発揮しはじめるのは1878年の7月に単行本として出版されてからである。ベーベルは1870年代の末に、ベルンシュタインは1878年に、そしてカウツキーは1880年に本書を読み、マルクス主義を受け入れるようになったと言われている。

「社会主義者取締法」は1890年に失効し、SPDは13年ぶりにドイツ国内において大会を開催できるようになる。1890年のハレ大会では党名を正式に「社会主義労働者党」から「社会民主党」に変更し(「取締法」の時代に後者の名前がポピュラーなものとなっていた)、組織規約を採択すると共に(ちなみに、党員資格は「党綱領の諸原則を承認し、党を力相応に支持する者」となっており、レーニンの党概念——職業革命家の集団——とは異質である)、新綱領の作成を幹部会に委託した。

幹部会案はエアフルト大会の前に作成、公表され、党内の討議にかけられる。その過程で『ノイエ・ツァイト』編集部は幹部会案を批判する論文を発

5) エンゲルスのベーベルへの手紙(1885年6月22日付)。邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第36巻、300頁。

表し、自分たちの綱領草案を提出する⁶⁾。この草案はエンゲルスやベーベルの支持を得ることになり、これを少し修正したものが 1891 年のエアフルト大会において採択されたのである。

エアフルト綱領は古典マルクス主義の精神を体現したものと言われ、その意味において、ベルンシュタインによる修正主義の試みとの関連では、この綱領の思想を詳細に分析する必要があるだろう。しかし本稿では煩雑さを避けるために、綱領作成過程の分析は省略し、エアフルト綱領の思想の趣旨を要約的に紹介することにしたい。

エアフルト綱領自体の発想は綱領冒頭の数パラグラフをみれば容易に理解できよう。すなわち、そこではこう言われている。

「ブルジョア社会の経済的发展は、自然必然性をもって、労働者が自分の生産手段を私的に所有することにもとづく小経営の没落を招来する。この経済的发展は、労働者を、彼の生産手段から分離して無産のプロレタリアに転化する一方、生産手段は比較的少数の資本家および大土地所有者の独占物となる。

生産手段のこのような独占化につれて、巨大な大経営による分散的小経営の駆逐がすすみ、道具の機械への発展がすすみ、人間労働の生産性の巨大な成長がすすんでいく。しかし、かかる変化から生じる利益はあげて、資本家と大土地所有者の独占するところとなる。プロレタリアートと、没落してゆく中間層——小ブルジョアと農民——にとっては、この変化は、彼らの生活不安、貧困、抑圧、隷属、零落、搾取がますます増大することを意味する。

プロレタリアの数はますます増加し、過剰な労働者軍もますます膨大にふくれあがり、搾取者と被搾取者との対立はますます陰悪さをまし、近代社会

6) Der Entwurf des neuen Parteiprogramms. *Neue Zeit*. IX-2, Nr. 49, 50, 51, 52. (Aug. und Sept. 1891.) 無署名論文であるが、カウツキーとベルンシュタインとの共作である。

を二つの敵対陣営に分裂させ、あらゆる工業国の共通の特徴となっている、かのブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争はますます激烈となっていく。

有産者と無産者のあいだの深淵は、資本主義的生産様式の本質に根ざす恐慌によってさらに拡大される。その恐慌は、ますます広範かつ破壊的な力となり、全般的な不安を社会の常態にたかめ、かくして今日の社会の生産諸力がもはや手におえなくなるほど増大したこと、生産手段の私的所有がその合目的な利用と十分な発達と両立しえなくなったことを立証している。」⁷⁾

みられるように、ここでは、① 両極分解の進行、② 資本家と大土地所有者以外の階級の貧困化、③ 階級闘争の激化、④ 経済恐慌の激化と社会の機能不全、といった思考が軸となっている。こうした綱領が採択されたことをもって、SPDにおけるマルクス主義の勝利と呼ばれたのである。

もっとも、以上の諸点をどのような幅で解釈するのかという点については——例えば、両極分解の進行速度について、あるいは貧困化の程度について——当時のSPD内部においても差異が存在した。だがここでその微妙な差異を無視するとすれば、SPDの資本主義崩壊論と言われるものは、① 中間層の没落と両極分解によって階級闘争が純粹に展開される舞台が形成され、② そして経済システムの矛盾（とくに恐慌）が①と連結されることにより、③ 階級闘争が激化し、④ プロレタリアートが何らかの方法で政治権力を譲り受ける、というロジックで構成されているとみることができる。そして、「プロレタリアートが何らかの方法で政治権力を譲り受ける」という場合、

7) 望月清司氏の訳（同氏訳『ゴータ綱領批判』岩波文庫に所収）に従う。なお、ドイツ社会民主党関係の綱領類については、次の資料集に基本的なもの（『共産党宣言』から1959年のバート・ゴータスベルク綱領に至るまで）が収録されており便利である。D. Dowe und K. Klotzbach (hrsg.) ; *Programmatische Dokumente der deutschen Sozialdemokratie*. Verlag J. H. Dietz. 1973.

その形式は——暴力的にか平和的にかは——なんとも言えないというのが SPD の一般的な見方であった。事実、エアフルト大会においては、議会主義を攻撃していた急進グループ(青年派 Jungen と呼ばれた)のリーダーの一部は除名されたのである。全体として、プロレタリアートが政治権力を掌握する形式は、比較的穏やかなものになるだろうというのが SPD 指導層の一般的な見方であったとみていいだろう。社会危機の中でブルジョア権力が支配を続けていく能力と同時に意志をも喪失し、プロレタリアートの前に権力を投げ出すだろうというのが一般的なイメージであった。またこのプロレタリア権力が採用するであろう政策にしても、カウツキーの『エアフルト綱領解説』からも分かるように、比較的穏やかなものであり、① 大経営を社会的所有に移行するさい、それが無償で行われるのか、有償であるのかは何ともいえないし、② 社会主義社会は原始的平等を目指すものではないから、財の分配の形態は当分は今日のものと変わらないし、また賃金支払いの現在の形態(固定給、時間給、出来高払、ボーナス)は社会主義社会の本質と矛盾しない、とみられていたのである。

したがって、ベルンシュタインが SPD のブランキズム的傾向を攻撃するという点について言えば、論争のなかでカウツキーが何度も反駁しているように、「風車に向かっての突進」であったと言えるであろう。しかし、それを実現する形式がどのようなものであれ、ともかく計画経済と社会的所有という観念とは、「最終目標」として、SPD にとって妥協の余地のないものであり、かつ資本主義社会はこうした方向へ向かって自然的に進化していくというのもまた SPD の基本的な認識としてあり、資本主義経済の崩壊論がこうした認識を支える軸点として機能していたのは否定できないところである。それゆえに、ベルンシュタインが、ブランキズム批判というレベルを超えて、エアフルト綱領の思想のこの中核部分それ自体を攻撃するようになると、論争はがぜん深刻なものとなっていくのである。

なお、参考までに、エアフルト綱領採択時点での党内の心理的なムードに

については、以下に紹介する言葉からでも、その一端を窺い知ることができよう。例えば、エンゲルスは1891年の10月にこう書いていた。——「この党は今日では、ほとんど数学的な計算で、権力獲得の時期を定めうる地点に到達したのである。」⁸⁾あるいはまたベーベルはエアフルト大会においてこう叫んでいる。——「ブルジョア社会はそれ自身の没落に向かって猛烈に驀進しており、したがって我々は、ブルジョア社会の手から滑り落ちた権力を拾い上げる瞬間をただ待っていれば十分なのだ（異議なしの声）」⁹⁾さらに冷静なカウツキーにしても『エアフルト綱領解説』においてこう書いていた。——「資本主義社会は破産に瀕している。その解体は今ではもう時間の問題にすぎない。」¹⁰⁾こうした心理的なムードのなかでエアフルト綱領が採択され、SPDはマルクス主義を受容するのである。

2. ベルンシュタイン論争の概観

E・ベルンシュタインについてのごく簡単な伝記的データを並べてみよう¹¹⁾。彼は1850年の1月にベルリンの下町に生まれた。父は鉄道の機関手で

8) エンゲルス「ドイツにおける社会主義」(1891年10月)邦訳『全集』第22巻, 256頁。

9) Protokoll Erfurt 1891. S. 172.

10) <Die kapitalistische Gesellschaft hat abgewirtschaftet ; ihre Auflösung ist nur noch eine Frage der Zeit.> K. Kautsky ; *Das Erfurter Programm. In seinem grundsätzlichen Teil erläutert.* Mit einer Einleitung von Susanne Miller. Verlag J. H. Dietz. 1974. S. 131. カウツキー『エルフルト綱領解説』都留大治郎訳(『世界大思想全集』社会・宗教・科学思想篇14, 河出書房, 昭和30年, 所収)93頁。

11) ベルンシュタインは多作家であり、前掲の『一社会主義者の発展のあゆみ』以外にも、自伝的なものをいくつか残している。Erinnerungen eines Sozialisten, 1918. そして, Sozialdemokratische Lehrjahre, 1973. Aus den Jahren Exils, 1918等がそれである。なお、ベルンシュタインについての研究書はかなりの数にのぼるが、全体的

あった。ギムナジウムを退学して銀行員として働くが、1872年にアイゼナハ派に加入。1878年にK・ヘヒベルク(Höchberg)の秘書としてチューリッヒに移り、『ゾツィアールデモクラート』紙の編集に参加。1881年1月から同紙の編集長となる。これはSPDの事実上の中央機関紙として機能し、国内にあるSPD系の新聞雑誌が検閲を恐れてペンを抑制していたのに比べ、同紙はそうした制約の外から自由な言論を展開し、非合法のルートを介してドイツ国内に持ち込まれていた。それゆえに、その編集長であるベルンシュタインはSPD内の急進派の有力なリーダーのひとりと目されており、事実、彼は帝国議会のSPD議員団の議会主義と日和見主義とを攻撃していたのである。

1888年にベルンシュタインはチューリッヒから追放され、彼と『ゾツィアールデモクラート』紙はエンゲルスのいるロンドンに移動する。1890年に社会主義者取締法は失効し、『ゾツィアールデモクラート』も廃刊となり、以後『フォアヴェルツ』がSPDの中央機関紙となるが、しかし、ベルンシュタインへの逮捕状はいぜんとして効力を持ち、彼は1901年の2月まではドイツに帰国できない状態におかれていた。その間、イギリス革命史や1848年革命史の研究などを行うことになるが、1896年の秋から「社会主義の諸問題」と題する一連の論文を『ノイエ・ツァイト』に発表し、激しい論戦を誘発することになるのである。

なイメージを得るためにはとりわけ次の二書が啓発的であるように思われる。Bo Gustafsson ; *Marxismus und Revisionismus. Eduard Bernsteins Kritik des Marxismus und ihre ideengeschichtlichen Voraussetzungen.* Europäische Verlagsanstalt 1972. (オリジナルはスウェーデン語) Thomas Meyer ; *Bernsteins konstruktiver Sozialismus.* Verlag J. H. Dietz. 1977. いずれも500頁前後の力作である。なお、1977年に開催されたベルンシュタイン思想についての国際セミナーではレベルの高い議論が展開されており、その大部の報告書もベルンシュタイン研究の全体的な状況をみる上では役に立つ。Vlg. H. Heimann/T. Meyer (hrsg.) ; *Bernstein und der Demokratische Sozialismus.* Verlag J. H. Dietz. 1978.

先にも触れたように、ベルンシュタイン自身は当初は急進派のリーダーとして登場し、彼は光栄ある非合法機関紙の編集長として党内に知られていた。事実、「転向」以前にベルンシュタインが書いたものを調べてみれば容易に分かることだが、彼は資本主義が失業をなくすことができるとみるのはナンセンスであると論じ、プロレタリアートは「議会の道」によってではなく、「革命的な方法」によってのみ政治権力を獲得することができると論じていた¹²⁾。またそもそも、エアフルト綱領の基になった『ノイエ・ツァイト』編集部草案にしても、カウツキーとベルンシュタインの共同の作品であったのである。こうした経歴を持つ『ゾツィアールデモクラート』のかつての編集長が「転向」を宣言したことは党内の人々を驚かすことになるのだが、この「転向」の経緯については——ベルンシュタイン自身様々な自伝の中で色々としているのだが——さほどはっきりしたことは分らない。フェビアン主義者との交流、1848年革命研究の成果、あるいは景気的世界的な回復といった事柄が言われているが¹³⁾、心理的な転換の機微は本人にとっても外部の人間に

12) 1885年に出版されたベルンシュタインの『社会的所有と私的所有』(Gesellschaftliches und Privat-Eigentum)では——Bo Gustafssonの要約によれば——次のような議論が展開されている。①工業部門のみでなく、商業・農業部門においても所有の集中が進んでおり、社会主義の物質的な基礎は存在している。②資本主義体制の内部での社会化——カルテル、トラスト、国営企業——は社会主義への移行を意味しない。それは資本主義の恐るべきジレンマを逃れようとする無駄な試みである。③社会主義に到達するためには、労働者階級は政治権力を獲得しなければならない。それは革命的な方法によってのみ可能である。我々が国政選挙に参加するのは、いくつかの改良のためと、とりわけプロパガンダの機会を利用するためであるにすぎない。また、エアフルト綱領の作成時点においても、注(6)で挙げておいた『ノイエ・ツァイト』論文において、「現代国家が失業を防止できるというのは反動的ユートピアである。失業は労働者を革命家にしていくテコである」と書いていた。Vlg., *ibid.*, S. 823-4.

13) とりわけ、フェビアン社会主義がベルンシュタインに与えた影響については、多くの論者が注目している。フェビアンとベルンシュタインとの関係については、とりわけ次の文献がある。H. Hirsch; *Der „Fabier“ Eduard Bernstein. Zur Entwicklungs-*

とってもさほど明示的なものではないというのが実態であろう。従って本稿では以下「社会主義の諸問題」にみられるベルンシュタインの理論とそれをめぐる論争の経緯を概略的にみていくことにしたい。

まず論争の経過を時系列的に整理してみよう。

ベルンシュタインの連続論文「社会主義の諸問題」は 1896 年の 10 月にスタートし、1898 年の 5・6 月まで続く。この連続論文は当初はさしたる反響を呼ばなかったが、第 6 番目の論文（「社会民主党の闘争と社会の革命」）において、ベルンシュタインが「最終目的は無、運動がすべて」というテーゼを宣言すると、党内急進派は猛烈な反発を開始し、バックスあるいはパルブスやローザ・ルクセンブルクを先頭にして、ベルンシュタイン批判の声が高くなる。これに対してベルンシュタインも反撃するが、この時点ではカウツキーは態度を明瞭にはしていない。1898 年の 10 月にシュトゥットガルトにおいて党大会が開催され、ベルンシュタインは——帰国できないので——「弁明書」をロンドンから送付する。大会ではベーベルがベルンシュタインの「弁明書」を——自分はこれに賛成できないと宣言して——読み上げるが、K・ツェトキン等が反ベルンシュタインの演説を行い、カウツキーもついに反ベルンシュタインの立場を鮮明にする。シュトゥットガルト大会の後、裏側での動きがいくつかあり、ベーベルはベルンシュタインの除名を計画するが、カウツキーはこれに反対し、ベルンシュタインへの手紙のなかで、自発的な脱党を勧める。——君はドイツの社会民主主義からは外れたが、別に社会主義から外れたわけではないのだ。イギリスの運動の中に君の席を獲得し、イギリス社会主義の代表者になるように努めるのがいい、という忠告を付けて。

ベルンシュタインはこの忠告には従わず、除名にもならなかった。その後

geschichte des evolutionären Sozialismus. Verlag J. H. Dietz. H. Frei ; *Fabianismus und Bernstein'scher Revisionismus 1884–1900.* Verlag Peter Lang. 1979.

『フォアヴェルツ』紙上においてベルンシュタイン、カウツキー、V・アドラーの間でいくつかのやりとりがあり、ベルンシュタインは兩人の勧めに従って自分の考えを本に纏めることになる。本は「数週間で」執筆され、1899年の1月に出版される。それが『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』である。この本の出版後、主としてカウツキーとベルンシュタインとの間で『フォアヴェルツ』および『ノイエ・ツァイト』を舞台として激しい論戦が展開され、ハノーヴァーでの党大会(1899年10月)を迎えることになる。この大会ではベーベルの提案になる反修正主義の決議案が賛成216、反対21の圧倒的な多数で採択され、ここに一応ベルンシュタイン論争は政治的な決着をみることになる。

資料的な紹介をかねて、論争の中で現れた文献をベルンシュタインとカウツキーのものに焦点を当てて、時間的に整理してみると次のようなものとなる¹⁴⁾。

A) 「社会主義の諸問題」を構成するベルンシュタインの一連の論文。

① 「ユートピア主義と折衷主義概観」

Probleme des Sozialismus. 1. Allgemeines über Utopismus und Eklektizismus. *Neue Zeit*, XV-1, Nr. 6. (1896. 10.)

② 「集産主義の適応領域と限界についての一理論」

Probleme des Sozialismus. 2. Eine Theorie der Gebiete und Grenzen des Kollektivismus. *ibid.* Nr. 7. (1896. 11.)

③ 「ドイツにおける産業発展の現在の状態」

14) この論争の中で執筆されたベルンシュタインの論文は、その多くが、「社会主義の諸問題」を含めて、彼の論文集『社会主義の歴史と理論によせて』(初版1901年、1904年の第2版では表題が『社会主義の理論と歴史によせて』となる)に収録されている。しかし収録の際にはかなりの加筆・訂正・削除が行われており、扱いには注意が必要である。

Probleme des Sozialismus. 3. Der gegenwärtige Stand der industriellen Entwicklung in Deutschland. *ibid.* Nr. 10.

④ 「イギリス農業関係の最近の発展」

Probleme des Sozialismus. 4. Die neuere Entwicklung der Agrarverhältnisse in England. *ibid.* Nr. 25. (1897. 3.)

⑤ 「空間と数の社会政策的意義」

Probleme des Sozialismus. 5. Die sozialpolitische Bedeutung von Raum und Zahl. *ibid.* XV-2, Nr. 30 u. 31. (1897. 4.)

⑥ 「社会民主党の闘争と社会の革命」

Der Kampf der Sozialdemokratie und die Revolution der Gesellschaft. *ibid.* XVI-1, Nr. 16 u. 18. (1898. 1.)

⑦ 「批判に答える幕間劇」

Kritisches Zwischenspiel. *ibid.* Nr. 24. (1898. 2 od. 3.)

⑧ 「社会主義における現実論的要素とイデオロギー的要素」

Das realistische und das ideologische Moment im Sozialismus. Probleme des Sozialismus. 2. Serie II. *ibid.* XVI-2, Nr. 34 u. 39. (1898. 5 u. 6.)

* シュトゥットガルト党大会 (1898 年 10 月 3 - 8 日)

B) シュトゥットガルト大会からハノーヴァー大会までの論戦

① ベルンシュタイン『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』

Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. (1899. 1.)

② カウツキー「ベルンシュタインの論戦書について」

1. 崩壊論

2. 自由主義と社会主義

3. 民主主義と階級闘争

Bernsteins Streitschrift. 1. Die Zusammenbruchstheorie. 2. Liberalismus und Sozialismus. 3. Demokratie und Klassenkampf. *Vorwärts*. 16. 17. 18. März 1899.

③ ベルンシュタイン「返答」

Antwort. *ibid.* 26. März 1899.

④ カウツキー「今一度ベルンシュタインの論戦書について」

1. マルクス崩壊論の最新の解釈
2. 民主主義的・社会主義的改良党
3. 我々の戦術

Nochmals Bernsteins Streitschrift. 1. Die neueste Lesart der Marx-schen Zusammenbruchstheorie. 2. Die demokratisch-sozialistische Reformpartei. 3. Unser Taktik. *ibid.* 8. 11. 12. April 1899.

⑤ ベルンシュタイン「私の立場とカウツキーの解釈」

1. 社会主義運動の推進力
2. 経済的および社会的崩壊——戦術と綱領

Meine Haltung und Kautskys Deutung. 1. Die Triebkraft der sozialistischen Bewegung. 2. Oekonomischer und gesellschaftlicher Zusammenbruch. Taktik und Programm. *ibid.* 18. 21. April 1899.

⑥ カウツキー「原理的対立か、あるいは偏見か? ベルンシュタインとの討論によせて今一言」

Prinzipieller Gegensatz oder Voreingenommenheit? Noch ein Wort zur Diskussion mit Bernstein. *ibid.* 26. April 1899.

⑦ ベルンシュタイン「対立点の制限か、それとも克服か? 本紙での私の最後の言葉」

Begrenzung oder Ueberbrückung der Gegensätze? Mein Schlusswort an dieser Stelle. *ibid.* 6. Mai 1899.

- ⑧ カウツキー「ベルンシュタインと唯物史観」
Bernstein und die materialistische Geschichtsauffassung. *Neue Zeit*. XVII-2, Nr. 27.
- ⑨ カウツキー「ベルンシュタインと弁証法」
Bernstein und die Dialektik. *ibid.* Nr. 28.
- ⑩ カウツキー「価値論と諸階級についてのベルンシュタインの見解」
Bernstein über Werththeorie und die Klassen. *ibid.* Nr. 29.
- ⑪ ベルンシュタイン「自然と歴史における必然性」
Die Notwendigkeit in Natur und Geschichte. *ibid.* Nr. 35.
- ⑫ ベルンシュタイン「弁証法と発展」
Dialektik und Entwicklung. *ibid.* Nr. 37/38.
- ⑬ ベルンシュタイン「労働価値か効用価値か？」
Arbeitswerth oder Nutzwert? *ibid.* Nr. 44.
- ⑭ ベルンシュタイン「階級闘争のドグマと階級闘争の現実」
Klassenkampf-Dogma und Klassenkampf-Wirklichkeit. *ibid.* Nr. 45 und 46.
- ⑮ ベルンシュタイン「エアフルト綱領の理論的部分に対する私の立場」
Meine Stellung zum theoretischen Teil des Erfurter Programms. *Vorwärts*. 3. Sept. 1899.
- ⑯ カウツキー『ベルンシュタインと社会民主党綱領』
Bernstein und das sozialdemokratische Programm. Eine Antikritik. 1899. 9.
- ⑰ ベルンシュタイン「自己防衛の一言。カウツキーの著作『ベルンシュタインと社会民主党綱領』の批判」
Ein Wort der Abwehr. Zur Kritik von Kautskys Schrift <Bernstein und das sozialdemokratische Programm>. *Vorwärts*. 7. Okt. 1899.

*ハノーヴァー党大会 (1899 年 10 月 9 ~ 17 日)

C) ハノーヴァー大会以後の論戦の余韻

① カウツキー「ベルンシュタインとベーベルの決議室」

Bernstein und die Bebel'sche Resolution. *Neue Zeit*. XVIII-1, Nr. 22.
(1900. 2.)

② ベルンシュタイン「ベーベルの決議案に対する私の態度」

Meine Stellung zur Resolution Bebel's. *ibid.* XVIII-2, Nr. 31. (1900. 4.)

③ ベルンシュタイン『社会主義の歴史と理論によせて』

Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus. 1901.

④ カウツキー「ベルンシュタインの以前の論稿と新しい溶解物——ベルンシュタインの『社会主義の歴史と理論によせて』について」

Bernstein's alte Artikel und neue Schmerzen. Ueber Bernstein; Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus. *Neue Zeit*. XIX-2, Nr. 35.
(1901. 5.)

⑤ ベルンシュタイン『科学的社会主義はいかにして可能か?』

Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich? 1901.

⑥ カウツキー「科学的社会主義に対する疑い」

Problematischer gegen wissenschaftlichen Sozialismus. *Neue Zeit*. XIX-2, Nr. 38. (1901. 6.)

*リューベック党大会 (1901 年 9 月 22 ~ 28 日)

3. ベルンシュタインの社会主義社会論

カウツキー・ベルンシュタイン論争をみていこうとすると、両者の争点を対比的に分析していこうとする手法が考えられるが、こうした手法はこの論争に関する限りあまり生産的なものではない。というのは、両者の論争はしばしば、あなたは私を誤解している、といったかたちをとっているからであって、これはとりわけ資本主義崩壊論の解釈、貧困化論の解釈において顕著である。あるいはときとして経済的な資料の読み方をめぐって煩瑣な議論が応酬されもする。こうした問題に逐一関わるのは退屈なものとなろうから、ここでは社会主義のイメージというテーマにしぼって、これについてのベルンシュタインの思考過程をフォローしていくことにしたい。

「社会主義の諸問題」シリーズを構成するはじめの4つの論文、即ち「ユートピア主義と折衷主義概観」、「集産主義の適応領域と限界についての一理論」、「ドイツにおける産業発展の現在の状態」そして「イギリス農業関係の最近の発展」、これらはあまり生彩のあるものとは言えないし、ベルンシュタイン自身の思考を正面から展開しているわけではなく、どちらかと言えば、反発を恐れて遠慮がちにペンをすすめているという感がある¹⁵⁾。

社会主義論という観点からみて、興味深い論理を展開するようになるのは、この連続論文の第5番目の論文、すなわち「空間と数の社会政策的な意義」という少し変わったタイトルを持つ論文からである。これは簡単に言えば、ドイツの社会主義者が漠然としたイメージの下で構想している社会主義社会論、すなわち素朴な国家死滅論への批判であり、ベルンシュタイン自身の考

15) そのためか、論文集『社会主義の歴史と理論によせて』に「社会主義の諸問題」を収録する際、第1と第2の論文は簡略化して一本の論文に整理し、第三論文は収録していない。

える社会主義社会論を展開したものである。ここで「空間」とは国家領域の広さを意味し、「数」とは当該の国家の人口を意味している。

以下この論文の主旨を若干パラフレーズしつつ紹介する¹⁶⁾。

まずコミュン型社会論に対する概括的な批判が提出される。——くさて、未来社会において、社会の様々な政策を指令するのは誰なのか。国民自身であるか。しかしこれは極めて特殊な性質を持った細かい仕事であり、これに関しては、人々が百科全書的な知識能力を持つようになると言われるかの未来の幸福なる時代になるまでは、少数の人間だけが関心と完全なる理解力とを持つものであろう。また、もっとも重要な問題だけが国民投票にかけられるとしても、未来の幸福なる国民は日曜日ごとに質問票を受け取ることになるが、これは彼らにとっても煩わしいことであろう。彼らが投票するには、それ以前において、質問事項の全てについて正確な知識を持っておく必要があるが、そのためには責任感の発達を必要とするだろう。数千万の投票者がこうした責任感をもっていると前提するのは幻想である。これまでの経験によれば、当該者の数が多くなればなるほど、責任感は薄くなるものである。ここでも数の影響が現れる。時が立つにつれて、投票は純然たるお遊びとなるだろう。国民の直接投票が公共の福祉を促進するようなやりかたで機能しなければならないとすれば、それは全体の利益に深く関わり、またあまり専門的でない性質を持っている事柄に制限されなければならないのである。>>¹⁷⁾

ここから未来社会においても特殊な訓練を受けた専門的な官僚装置が必要であるという考え方が引き出されることになるが、こうした国家装置の必要

16) 以下において、ベルンシュタインの論文を紹介する際には、翻訳上の精確性よりも、論旨を鮮明にすることに重点を置き、場合によっては、原文をパラフレーズしつつ紹介する。

17) Bernstein ; Die sozialpolitische Bedeutung von Raum und Zahl. *Neue Zeit*. XV—2, Nr. 30. S. 105.

性は、どのような社会においても、個別利害と共同利害とは対立し、両者の自動的な調和の回路は存在しえないという論理によって支えられている。個別利害と共同利害との調整機関として国家その他の公的機関が位置づけられるのであり、この観点はベルンシュタインの思考においては極めて大きなウェイトを持っている。さらにこれとの関連において注目しておいてよいことだが、ベルンシュタインにとっては「プロレタリアート一般」などはどこにも存在しないものであり、プロレタリア的な階級意識と言われるものも純然たる虚構以外のなにものでもないのである。プロレタリアートと呼ばれるものも、多種多様な利害関係によって構成されている個別集団に分解されるのである。実在しているのは、こうした個別集団であり、その利害のみである。階級意識をめぐる問題はあとでもふれることにして、国家装置の必要性の問題については、この論文では更にこう語られている。

「一般利益を有効に守るためには、共同社会 (Gemeinschaft) を規則的に機能させる権能を持ったもの、即ち官吏が必要であり、恣意性を予防するためには一般的な妥当性を持つ恒常的な規則、即ち法律が必要である。人間の数、空間領域の大きさ、生産が分化していく部門の数の増大、生産単位の数の増加、多様性、——これらのことは全て共同利害に対して個別利害を自動的に調和させていくことを不可能とする。……社会生活においても、経済の分化と共に、ゲゼルシャフトの利益をそのものとして代表する行政団体 (Verwaltungskörper) の形成は欠かすことができない。このような団体とは、これまでも、そして今日でも、国家である。」¹⁸⁾

こうして利害の調整機関としての国家装置が展開される。これをベルンシュタインのラサール主義的側面と解釈する向きもあると思うが、しかし、ベルンシュタインの本来の志向は国家装置の権能を制度的に制限する方向を強調することにあり、これは同時にそのまま分権化論、中間団体論につ

18) *Ibid.*, Nr. 31. S. 140.

ながら、他方では「経済的自己責任」の倫理を強調する視点につながっていくのである。

社会主義政党は現在の段階ではアジテーションの必要性からも、民衆の生活に対する国家の保護の拡大を要求し、民衆の権利を強調することになるが、ベルンシュタインによれば、こうしたことは現在の運動を進めていく上では自然なことではあるとはいえ、しかし〈大衆の社会倫理への反作用という点では、危険がないこともない。〉¹⁹⁾ 権利に慣れた大衆には義務の感覚が弱くなるからであり、社会倫理の頹廃を招くことにもなるからである。彼によれば、〈社会主義者にとっては、国民をほどこしの受取人へと教育するような政策へと活動を向けることは好ましくないことである。それは社会民主主義の利益とはならないし、一般に社会的責任感を低下させるようなものは悪い社会政策である。〉²⁰⁾ 同様に、労働者の権利を無限定に肯定する考え方も間違いである。例えば労働権について、彼はこう書いている。

〈労働権にある種の職業に従事する無条件の権利という性格を与えることは不可能でもあるし、望ましいことでもない。現代の文明国家のように複雑な有機体ではそのようなことは経済的に不合理であるし、また口げんかのタネとなるだけであろう。このような無条件的な「労働権」が社会主義理論の必然的な帰結とみるのは間違いである。同じく、社会主義とは、万人が指令によって一定の労働を命じられるという労働義務を意味しているわけでもないのである。〉²¹⁾

このようにベルンシュタインが「経済的自己責任」の倫理、言い換えれば「自助の倫理」を強調するのは、自己責任という観念は、論理的に個人の自由という観念とつながっているとみているからである。自己責任という観念

19) *Ibid.*, S. 138.

20) *Ibid.*, Nr. 30. S. 106.

21) *Ibid.*, Nr. 31. S. 140–141.

が希薄になるとときには、それに比例して全体主義的国家が前面に登場することになるからである。

「〈計画的な社会秩序が経済的自己責任の義務を追放するなどということは全く考えられない。社会主義はただ自己責任の遂行を容易にするだけであり、それ以上のものではない。周知のように、自己責任というのは社会原理の一面であり、その他面は個人的自由 (persönliche Freiheit) である。一方は他方なしには考えられない。どんなに不合理なものと聞こえようとも、自己責任性を否定する思想は全く反社会主義的である。その代わりに生まれてくるものは、完全なる専制か一切の社会秩序の解体かのどちらかであろう。〉²²⁾

ベルンシュタインにおいて、自己責任の倫理が国家専制の制限あるいは個人的自由を思想的に保証するものであるとすれば、中間機関あるいは中間団体論は国家専制を制度的に抑制するものと位置づけられることになる。

「〈現代国家制度の空間的な拡大、およびその領域内に住む住民数の膨大さは、国家行政体の行為能力を個々人が知ることを困難にする。……個々人に対して、この巨大なる共同団体 (Gemeinwesen) が無媒介に向かい合うとしたら、民主主義も空虚な言葉になるだろう。最善の選挙制度も直接立法もこの態度をほとんど変えることはできない。個別意志は他の個別意志にすりつぶされ、実際上の支配者は、指導的な行政機関の長、官僚制ということになるだろう。したがって、中間機関 (Zwischenorgan) が重要であり、不可欠である。〉²³⁾

この中間機関としてベルンシュタインがイメージしているのは主として地方自治体であり、彼自身が認めているように、こうした発想はフェビアン理論的な自治体社会主義論 (Municipalsocialismus) から影響を受けたものである。彼によれば、社会主義社会において、国家がすべてのことを行おうとす

22) *Ibid.*, S. 141.

23) *Ibid.*, S. 142.

れば、空間と数の膨大性を前にして途方にくれることになる。〈国家は……自分自身だけを頼りにしていると、膨大な生産企業の数に前にして絶望的となるであろう。……しかし自治団体が利用され動員されるようになると光景は一変する。それは空間的な膨大性を一掃し、数の関係を人間的なものとするのである。〉²⁴⁾ こうして〈今日の国家によってなされている機能の大半を民主主義的な自治団体に解消すること〉²⁵⁾ は現実的な政策遂行上からも、また個人倫理の高揚という点からも要請されることになるのである。数万もの数の企業体を前にすれば、国家あるいは社会がそれらを直接のコントロール化におくという発想は全くナンセンスなものとなろう。数万の企業体というこの数字は「社会」が生産するという言葉は空語でしかないということを示している。社会が大・中の企業としか関わらないとしても、そうした個別企業に代わって社会が直接に生産するということは、ある種の管理機構を——これに較べれば今日の郵便や鉄道の管理機構でさえ子供だましでしかないようなそれを——前提とするだろう。委託が——この場合には責任と共に権利も移されることになるのだが——それが私的な生産グループへのそれであれ、あるいは公的団体へのそれであれ、絶対に必要である。〉²⁶⁾

以上がこの論文の要旨であるが、ここで展開されているベルンシュタインの社会主義社会論を要約的に整理すれば以下のようなものとなる。

1. 個別利害と一般利害の調整機関としての国家の存在。
2. 国家の活動領域の限定——例えば公園、街路整備、学校教育といった公共的機能への限定
3. 経済的・社会的機能の中間団体（公的あるいは私的な）への委譲。こ

24) *Ibid.*.

25) *Ibid.*, S. 143.

26) *Ibid.*, S. 140.

の場合、責任と共に権利をも移すこと。

4. 自己責任の倫理の発揚。

ここでは当然のことながら、ベルンシュタインはまだ計画経済と市場経済との関係について深く考えるまでには至ってはいないが、しかしそれでもすでにこの段階において、こうした彼の発想のスタイルは国家社会主義的なそれとは極めて異質なものであり、スミスの社会理論とフェビアン的社会理論との融合体に近いものであったということが了解できよう（実際、論争の中では、ベルンシュタインの思考はイギリス的なものであり、ドイツには当てはまらない、という批判がくりかえし現われるようになる）。ここでは社会主義はすぐれて機能的な意味合いにおいて解釈されており、農工部門の社会化という最終目標的な理念は後景に退いているのである。こうした機能主義はこのすぐあとに発表された論文においては、より印象的な表現において現れることになる。そのとき同時に正統マルクス主義と彼の間にある距離の大きさも、誰の眼にも明らかなものとなり、激しい反発を誘発することになるのである。

4. 「最終目標は無、運動が全て」という思考

「社会民主党の闘争と社会の革命」と題された論文は二部から構成されている。即ち、

1. 論戦によせて

Polemisches (*Neue Zeit*, Nr. 16.)

2. 崩壊論と植民地政策

Die Zusammenbruchs-Theorie und die Kolonialpolitik (*ibid.*, Nr. 18.)

この論文は「最終目標は無、運動が全て」というテーゼを宣言したものとして有名となった。全体の論理展開は、第2部のタイトルからも分かるように、一方では資本主義崩壊論の批判、他方では植民地政策を論じるものとなっている。後者の植民地政策についてのベルンシュタインの思想もまた党内左派の反発を誘発し、とりわけベルフォート・バックスとの間で論戦が展開された。というのも、ベルンシュタインは公然と資本の文明化作用論を展開し、後進的な非西欧諸国が西欧諸国の支配下に入ることは後進諸国の利益にもなることであり、長期的な視野からみれば、SPDは西欧資本主義諸国による植民地政策に無限定に反対すべきではない、と主張したからである。この問題は他の論者をも巻き込んで植民地政策論争に発展し、以後党大会のメインのテーマのひとつになっていくことになる。

このテーマに関連してベルンシュタイン自身はこう書いている。

〈……バックスはあたかも資本主義の不在は窮乏と搾取の不在であるかのように言っている。また交易が必然的に原住民を貧困化するかのように言っている。しかしバックスには分かっていないようだが、資本主義自身も自分の発展史を持っており、様々な時代には様々な様相を示しているのであるし、現代の民主主義的な制度およびそれに対応した社会的義務感の圧力の下で、資本主義も所有が政治権力をも独占していた時代とは異なった様相を持つことになるに違いないのである。〉²⁷⁾ 〈ヨーロッパの世論の今日のような状態の下では、ヨーロッパの行政大権の下へ植民地原住民の従属は、彼らの生活状態の悪化を必ずしも意味しない。〉²⁸⁾

周知のように、これは今日においてもきわめてデリケートな問題であるが、本稿ではこのテーマは迂回することにし、「最終目標は無、運動が全て」とい

27) Bernstein ; Der Kampf der Sozialdemokratie und die Revolution der Gesellschaft. *Neue Zeit*. XVI-1, Nr. 16. S. 491.

28) *Ibid.*, S. 492.

うテーゼが語られることになった文脈の解析に直ちに移ることにする。

この高名なテーゼは「崩壊論と植民地政策」と題する第二部の中において提示される。彼はまず経済恐慌に対する資本主義の適応能力を論じるところからはじめる。例えば、交通・運輸・通信手段の発達が持つ意味、カルテルやトラストの成長といった経済の寡占化が持つ意味などが論じられ、ベルンシュタインはこうしたものが恐慌に対する資本主義の適応能力を高めていると論じる。ここから資本主義の崩壊論を批判するのである。

ベルンシュタイン論争において、論争の主たる争点となったのはこのテーマについての解釈であった。これをめぐって多くの文献が現れ、経済学的な議論が展開されることになったのである。カウツキーの諸論考はもちろんローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』もこうした文脈で構想されたものであるし、ヒルファールディングの著名な『金融資本論』にしてもそうである。再生産表式の様々な研究にしても、この論争の文脈の中から出てきたものであり、その意味ではこれを焦点とした論争も意味がないわけではない。しかし、いわゆる崩壊論争を少し調べてみれば容易に了解されることだが、この種の論争は実際にはあまり実りの多いものではない。とりわけ、この問題をめぐるカウツキーとベルンシュタインとの論戦はあらさがしの水かけ論争の様相を呈している。実際、資本主義が崩壊するか否か、寡占体制が資本主義の適応能力を高めることになるのか否か、といったテーマはアプリオリにはなんとも言えないものである。そしてまた、カント的不可知論を信奉するベルンシュタインにとっては、こうした論戦はあまり似合わないものである。

ベルンシュタインの社会主義論あるいは社会主義運動論は崩壊論の文脈を離れても、それ自体としての意味を有しているように思われる。従って我々は崩壊論の解釈論争には深入りしないことにしよう。

資本主義の経済的な適応能力、つまり生存能力が強化されつつあるとすれば、社会主義ははるか遠い先のはなしになってしまうのではないかという疑念に答えて、ベルンシュタインはこう書いている。

〈社会主義の実現ということで、すべての点で厳密に共産主義的に組織された社会の建設を考えているのであれば、それははるか先のことだ。これに反して私は確信しているが、すでに現在の世代は相当程度 of 社会主義の実現を——登録商標を持ったような形態でのそれではなく、実質的な意味で——経験できるだろう。社会的義務の範囲の拡大、即ち社会に対する個人の義務と権利、個人に対する社会の義務の範囲の拡大、経済生活に対する社会の監督権の拡大、市町村、郡や州での民主的な自治の成熟、これら自治団体の任務の拡大、これらのことは全て私にとっては社会主義への発展を、あるいはそう言いたければ、社会主義の部分的な実現を意味している。もちろん、この発展には企業の私的管理から公的管理への引継ぎを伴うことであろうが、それは徐々に進行していくものであろう。……しかしまた、公共団体 (Gemeinschaft) が経済関係のコントロール権を行使するようになると、私企業の公企業への実際的な転換というものは、通常考えられているほどの根本的な意義を持たないものとなる。社会主義は、全工場の国有化のなかにとりよりも、すぐれた工場法の中にひそんでいることもありうるのである。〉²⁹⁾

このあとに続けて、例のテーゼが宣言されることになる。

〈私は公然と認めるが、一般に「社会主義の最終目標 (Endziel)」と呼ばれているものには私はほとんど関心がない。この目標は、それがどのようなものであれ、私にとっては無 (nichts) であり、運動が全てなのである。運動ということで私が理解しているのは、社会の全般的な運動、即ち社会進歩であり、この進歩を生みだす政治的・経済的な宣伝活動と組織化である。…SPD がなすべきことは、労働者階級を政治的に組織し、民主主義のために訓練することであり、労働者階級を高めるために、また民主主義に適ったように国家制度を変革するのに適合しているような、国家のなかでのすべての改良を

29) *Ibid.*, Nr. 18. S. 555–6.

闘うことである。》³⁰⁾

この論文は大きな反響を呼んだ。党内左派は激しく反発し、『ノイエ・ツァイト』編集部にはいくつかの批判論文が送られ、掲載を要求した。ベルンシュタイン自身もこの反発の波を前にして、「社会主義の諸問題」の予定していたプランを中断して〈Kritisches Zwischenspiel〉（「批判に答える幕間の上演」とでも訳せようか、以下では「幕間論文」と呼ぶことにする）を発表した。この「幕間論文」の冒頭には『ノイエ・ツァイト』編集部の署名を持つ（つまりカウツキーの）注が付けられている。そこでは、ベルンシュタインを批判する論文が本誌にいくつか寄稿されているが、これらは全てベルンシュタインの真意を誤解するところから出ているものであり、従って本誌としては掲載しないことにした、と記され、ベルンシュタインの考え方について討議するのは彼の連続論文のシリーズが終わってからにしてほしい、と書かれている。

先の論文「社会民主党の闘争と社会の革命」が反発を誘発したのは「最終目標は無、運動が全て」という表現の故であるが、この「幕間論文」ではこのテーゼの補足的説明がメインの仕事となっている。

ベルンシュタインは「幕間論文」を発表する少し前に、SPDの中央機関紙『フォアヴェルツ』編集部宛てに「弁明書」を送付していた。これは、彼の論文「社会民主党の闘争と社会の革命」は誤解を生みやすい書き方をしている、という『フォアヴェルツ』編集部の苦情に答えるものである。この「弁明書」の中の基本的な部分は「幕間論文」に再掲載されている。まずそれを紹介してみよう。

「私は社会主義運動のいわゆる最終目標に関わることを拒否したのであるが、そのことから、私は一般にこの運動のはっきりとした一定の目標を拒否したということになるのであろうか。もし私の言葉がそのように理解されて

30) *Ibid.*, S. 556.

いるとすれば残念なことである。目標なき運動はカオス的な衝動である。何故なら、それはまた方向なき運動でもあるからである。社会主義運動がコンパスを欠いたまま、ウロウロすべきものではないとすれば、もちろん社会主義運動は、それが自覚的に志向する目標を持っていなければならない。しかし、この目標とは何らかの社会プラン (Gesellschaftsplan) の実現ではなく、社会原理 (Gesellschaftsprinzip) の貫徹なのである。社会民主主義の任務がその時々の労働者の闘争の必要から生じるものではない以上、我々は社会主義運動の目標を——ユートピアに陥りたくはないとすれば——原理として定式化することができるだけである。例えば、「Genossenschaftlichkeit〔仲間意識、友愛性、協同性とでも訳せよう——引用者〕の全面的な貫徹」というふうに。私は社会主義者の志向の全体をこの言葉以上に内包しているものを他に知らない。これは一切の階級支配と階級特権とを排除している。自分の階級状況の故に特権を持っているような者は仲間 (Genosse) ではない。しかしこれは目標を示しているとしても、それへの道と手段については何も語っていない。こうしたものはただ所与の条件からだけ見出すことができ、その時々の運動の状態と関連づけられねばならないのである。それ故に一般的な目標が与えられれば、大切なことは運動それ自体と、この目標の方向への前進である。しかし、いかにしてこの発展の最終目標を詳しく描き出すかは全くどうでもいいことである。そうした思弁は全て歴史が片づけてしまっている。……大切なことは、運動の一般的な行程を明らかにし、それに関わるファクターを精確に吟味することである。これを行うならば、我々は最終目標についてあれこれ心配する必要はないのである。》³¹⁾

「幕間論文」ではさらに『共産党宣言』についての長い論評が試みられる。それはすべてプロレタリアートの階級意識論に関わるテーマをめぐって旋回している。ベルンシュタインの主旨は「プロレタリアート一般」という概念

31) Bernstein ; Kritisches Zwischenspiel. *Neue Zeit*. XVI—1, Nr. 24. S. 741.

の否定、従ってまた「プロレタリア的階級意識」なるものの否定というところにある、このテーマ自体論争の中で何度も反復して論じられることになる。ベルンシュタイン自身がこのテーマにこだわるのは「プロレタリア的階級意識」という概念は「最終目標」という概念と密接な関連性を持っているからである。この関連性は後に G・ルカーチの階級意識論において典型的な表現を獲得することになるのだが、そこでは明示的に、プロレタリアートはその現存在の形態から、アプリアリに人類史的な使命を付与されているという発想がみられることになる。これに対して、ベルンシュタインにおいては、プロレタリアートは日常的に存在している相においてしか存在しないものである。プロレタリアートと呼ばれているものは様々な利害関係をもった様々な層に分解されうるものであり、各層の集団の意識を規定しているのは伝統や民族意識、工場の外での諸々の日常的な生活過程なのである。「プロレタリアート」の意識は工場の中においてのみ作られるものではないというのがベルンシュタインの基本的な思考である。従って、〈我々が「プロレタリア的見方」と呼ぶものは、プロレタリア自身にとっては差し当たりイデオロギーなのである〉³²⁾という言い方が生まれることになる。こうした経験的存在としてのプロレタリアートの有り方については、まさに経験的な事実として、正統マルクス派にしても語りうるところであるが、しかし彼らとベルンシュタインとの差異は、経験的存在としてのプロレタリアート以外にプロレタリアートなるものは決して存在しないという点に後者がこだわるところにある。いわば階級意識論において「物自体」、何らかの超越的なものは存在しないのであり、この点において、経験的存在としてのプロレタリアートの中に「それ以上の何か」をみようとする思考（典型的にはルカーチをみられたい）とは決定的に対立するものであり、この問題での見方の差異は想像される以

32) do., Das realistische und das ideologische Moment im Sozialismus. Probleme des Sozialismus. 2. Serie II. *Neue Zeit*. XVI-2, Nr. 39. S. 389.

上に本質的なものとなるのである。

さて「最終目標は無、運動が全て」というテーゼが激しい反発を誘発したのは、このテーゼでは政治権力の獲得というテーマがトリヴィアルな位置におかれることになるからである。正統マルクス派においては、カウツキーによるベルンシュタイン批判にみられるように、資本主義体制の（何らかの）崩壊現象⇒プロレタリアートによる政治権力の獲得⇒生産の社会化による経済の再建と発展、という物語は基本的なものとしてあり、この物語の結節点には「政治権力の獲得」という命題が立っているのである。ところが、ベルンシュタインにおけるように、一方では資本主義崩壊論が否定され、他方では生産の社会化が重要視されなくなり、「民主主義の進行＝社会主義の実現」と考えられることになれば、この物語全体が崩壊してしまうことになるのである。そしてベルンシュタインのこうした発想には、民主主義の進行は、正統マルクス派の構想する社会主義以外の形態によって[も]、可能となるという思考が潜んでいるのである。ベルンシュタイン論争の持つ現代的なアクチュアリティはむしろこの点にあり、ここにこそこの論争の本当のテーマがあると言えるだろう。事実、ベルンシュタイン自身「幕間論文」においてははっきりとこう書いていた。

〈生産手段の社会化は、それによって合理的にかの目標〔全体の福祉―訳者〕が実現できると予期される場合にのみ、我々が志向すべきものとなる。この意味において私は、良き工場法は全企業の国有化よりも多くの社会主義を内包しうるという文章に固執するものである。〉³³⁾

1898年のシュトゥットガルト大会の後、ベルンシュタインは『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』を出版し、これをめぐって主としてカウツキーとの間で論戦が展開される。論戦のテーマは多岐にわたり、政策論から認識論・科学論の分野にまでテーマは展開されるが、社会化の是非、その水準と

33) do., Kritisches Zwischenspiel. *ibid.*, S. 742.

いうテーマ、あるいは（民主化としての）社会主義の実現のプロセス等が焦点のひとつとなる。ちなみに、社会化という言葉は当時の SPD 内部において頻繁に使用されている語であるが、その概念内容は必ずしも一義的な明瞭性を持ってはいない。この概念的な曖昧性が 1918 年のドイツ革命後の社会化論争にも様々な影響を与えることにもなるのだが、しかし全体としては、ベルンシュタイン論争の中でみる限り、ここで社会化とはごく単純に私企業の公有化という意味で使用されていると理解しておけばいいだろう。

これまで見てきたところからも推測されるように、ベルンシュタインにとって社会化は必ずしも（民主主義としての）社会主義にとっての必要条件ではない。そもそも社会化は純経済的な要請から生み出されてくるものでもないのである。生産手段の集中、私企業の規模の拡大は必ずしもその部門の社会化を必要とするものでもないのである。

〈私は社会主義をもっぱら経済から演繹することは不可能であるばかりか、不必要でもあると考える。生産手段の集中はおのずと社会主義をもたらすという必然はなく、その集中が別の社会形態とも結合しえないということはまだ証明されているわけではない。〉³⁴⁾

〈……経営が大きくなるにつれて、それを社会化する経済的必然性はますます小さなものとなってくる。何故なら、その場合には大経営は社会化が成しうるたいていのことを純粹に経済的に遂行してしまうからである〔おそらく経済の制御が念頭に置かれている－引用者〕。生産の経営技術的發展〔大規模化－引用者〕は、それがみずから直接に社会化を促すという意味での、社会主義の物質的な要因なのではない。社会化はむしろ、つねにまず間接的に、もっと広い社会的必要性あるいはそれどころか政治的必要性を考慮することによって進むのである。郵便や鉄道などの場合がそうである。〉³⁵⁾あるいはま

34) do., *Meine Haltung und Kautskys Deutung. Vorwärts.* 1899. 4. 18.

35) do., *Meine Stellung zum theoretischen Teil des Erfurter Programms. Vorwärts.* 1899. 9. 3.

た〈大経営の国有化を必要とする内部からの差し迫った要因は存在しない。国有化の必要性はつねに生産の外部から出てくるのである。〉³⁶⁾

要するに、社会化を行うか否かは、広い意味での社会政策的な見地から、民主主義を進展させうるか否かに応じて、その時々ケース・バイ・ケースで考えるべき事柄であり、社会化自体をアプリアリな目標と考えるのは本末を転倒しているということである。そしてベルンシュタインによれば、現代社会において民主化が徐々に進行しているとすれば、我々はこの方向線上において社会主義を考えればいいということになる。この方向線の先に何があるかは不確定である——また事柄の必然からみて、永遠に不確定である——としても、この方向線の上にあるかぎり、我々は社会主義を過程していると言えるのである。これが、最終目標を持たない「過程としての社会主義」の意味であり、「修正主義」と呼ばれるものの意味内容である。

〈人間は個人として、あるいは集団や階級として、多少とも共同体と対立する。プロレタリアートにしてもそうである。……諸々の階級の利害は立法の場に持ち込まれ、対立し調停され、その中から一般利益が現れてくる。共同体が民主主義的なものになるにつれて、ますますそういうことになっていく。……民主主義の票を必要とする政党はどのようなものであれ、一般利益に対して自分の貢物を与えなければならないのである。……階級利益が斥けられ一般利益が力を獲得する。私が言っているのは、経済的諸要因に対する社会の自由のこのような増大なのである。〉³⁷⁾

〈「資本貴族」が組織された生産手段を代表するとすれば、労働者の集団は組織された、生きている労働力を代表する。……両者の上には、組織され・立法によって代表される社会が立っている。……国家と自治体に組織された社会、立法、そして生産部門の社会的監視、調整、指導のために増大する行

36) *Ibid.*

37) *do* ; Die Notwendigkeit in Natur und Geschichte. *Neue Zeit*. XVII-2, Nr. 35. S. 63-66.

政機構、こうしたものについてカウツキーはどこにおいても言及してはいない。〉³⁸⁾

階級国家論を意識するあまり、ベルンシュタインはここで社会なり国家を実体的なものとして扱う傾向が強いが、プーランツァス的に解釈すれば、ベルンシュタインが言う国家もまた、諸階級あるいは諸集団の力の凝集場として解釈すればいいのであるし、そしてそうした解釈がベルンシュタインの論理と直接矛盾するわけではない。そして、この力の凝集場において民主主義が進行するとき、そのとき我々は同時に社会主義について語ることができるのである。

〈経済の領域での労働者の組織的な創造物と、国家や自治体のなかで戦闘的民主主義が作り出したものの中から社会主義社会は生まれてくる。……政治的・経済的闘争の文明化の中に、私は社会主義の実現の最良の保証をみとめるものである。〉³⁹⁾

「社会主義の諸問題」シリーズの最後を飾るのは「社会主義の現実論的な要素とイデオロギー的な要素」と題する論文である。この論文はそもそも「科学的社会主義」とはどのような意味であるかを問うものであり、社会主義思想における科学とイデオロギーとの関係を問うものである。ベルンシュタインのこれについての考え方は、後に彼の講演記録「科学的社会主義はいかにして可能か？」(1901年6月)に集約されることになる。彼の立場は事実上「科学的社会主義」というタームを形容矛盾とみるものであるから、正統マルクス主義派からは社会主義の科学性を否定するものだという攻撃を受け、1901年9月のリューベック党大会では、ベルンシュタインの「曖昧な立場」をとがめるベーベルの決議案が提出され、203対31の圧倒的多数で可決されるこ

38) *Ibid.*, S. 76–77.

39) *do* ; *Meine Stellung zum theoretischen Teil des Erfurter Programms. ibid.*

とになる。

ベルンシュタインはこう問うている。——我々は「科学的社会主義」という言葉を何か自明の・出来上がったものとして使っているのだが、果たして、社会主義が科学であるとはどういうことなのであろうか。この問いとの関連においてヘーゲル主義的思考が批判される。

〈我々は世界の究極の基本法則を経験的に確認しているわけではないから、その法則は科学的に確認された事実に基づく我々の推論の産物として概念的につかまえるほかはない。この意味において、統一的な世界像を作ろうとしている全てのひとにとって——ヘーゲルであれ誰であれ——思考過程が現実的なものの創造者である。どの事象も思考過程を通してはじめて、我々にとって「現実的なもの」となる。〉⁴⁰⁾

〈世界の関連についての我々の認識は、一部は我々の認識手段がその都度制限されているために、また一部は我々の知覚はいつも障害を持っているために、不完全である。このことを承認し、我々の認識の境界の外にある事物の関連を「物自体」として処理するならば、この境界のこちら側にある領域については、これをあらゆる二義性を伴う論理的矛盾から解放することができであろう。しかし、境界の存在を否定するならば、我々の全世界観の中に矛盾を持込み、我々の悟性の権利を神秘的なより高い理性の矛盾にみちた弁証法のために犠牲にすることになるだろう。その場合には弁証法は、諸問題の認識された関連の定式化を体系的に説明する手段ではなく、恣意的な構成への衝動、事物の真に科学的考察の障害物となるだろう。〉⁴¹⁾

周知のように当時は新カント派哲学の興隆期であり、C・シュミットをはじめとして修正主義派はこの哲学の影響を強く受けており、シュミットとブレハーノフとの間では、カントかヘーゲルか、をテーマとする論争が展開さ

40) do., *Dialektik und Entwicklung. Neue Zeit.* XVII-2, Nr. 37/38. S. 23-24.

41) *Ibid.*, S. 36-38.

れることにもなる。ベルンシュタイン自身はシュミットを高く評価していた。

さて、この種のカント主義から「科学的社会主義」を論じていくとすれば、そこからは自然と『科学的社会主義はいかにして可能か?』において展開される思考が生まれることになるだろう。この講演記録の要旨とは以下のようなものである⁴²⁾。

〈科学とは対象の客観的な認識であり、党派性を持つものではない。科学は「境界線」のこちら側にとどまるから、「究極原因」に関してはつねに不可知論的である。しかし社会主義はつねに Sollen あるいは Wollen を含み、「境界線」のこちら側にとどまっているわけにはいかない。そうでないと、そもそも党の運動などできないであろう。「科学的社会主義」という場合の「科学的」とは、この Wollen の理論的な根拠づけについて言われるもので、Wollen そのものが「科学的」であるというわけではない。「科学的社会主義」という言葉もこうした限定された意味で使われなければならないもので、どちらかと言えば誤解を与えやすい言葉である。むしろ、社会主義については「科学的」という言葉は避け、「批判的社会主義」と言うほうがいいだろう。〉

カウツキーはこれに対して全く気の抜けたような批判を試みているのだが⁴³⁾、ともあれ、ベルンシュタインのこうした「科学的社会主義」観が、「最終目標は無、運動が全て」というテーゼと密接に関連していることは容易に

42) テキスト (Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich?) は前掲の、H. Hirsch (hrsg.); Ein revisionistisches Sozialismusbild にある。邦訳は前掲の佐瀬昌盛訳『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』に収録されている。

43) Kautsky; Problematischer gegen wissenschaftlichen Sozialismus. *Neue Zeit*. XIX-2, Nr. 38. カウツキーの反批判は、社会主義は「中国人の科学観」では科学とは認められないかもしれないが、「我々近代西欧人の観点からは」科学であり、後者の観点からは、既知のもの（経験的な事実）から合理的に推論された事柄（つまり社会主義の命題）は仮説であるが、しかし西欧的な科学観では仮説も科学である、ということにつきる。

判別されよう。ヘーゲル主義の拒絶が最終目標の観念を無へと放逐するのである。

これによって同時に党それ自体のもつ科学性の御旗も無効とされる。党が持つ思考の内、科学性を主張しうるのはごく狭い——経験的に確定された——範囲のものでしかありえない。これを超えるものは、Wollenの世界に属する事柄となるのである。「社会主義の諸問題」における表現を引いてみるならば、〈党の持つ科学上の前提は、つねに限定された承認しか要求できないものである。何故なら、科学的な研究は党のあとについて行くのではなく、先駆者として党に先行しなければならないからである。〉⁴⁴⁾

お わ り に

以上みてきたように、ベルンシュタインの思想、彼の修正主義はひとつの有機的な連関性を持ったものであって、その点において、単に既得権益を守り・拡大することを唯一の目標としていた党の実務家層——その頂点にはフォルマルが立っている——の改良主義とは次元を質的に異にするものであった。

本稿はこうしたフォルマル的な改良主義との差異を意識しつつ、ベルンシュタインの思想をそれ自体としてとりだし、現代的な観点から整理を試みたものであるが、そうした観点から彼の思想をみると、いくつかの時代的な制約の刻印を孕んでいるとはいえ、そこには依然としてある種のアクチュアリティがあることは否定できないように思われる。最終目標を無と宣言するその発想はすぐれて現代的なものでさえある。しかし、このテーゼを語る時、ある一点において、ベルンシュタインと現代の社会主義理論とでは基

44) Bernstein ; Das realistische und das ideologische Moment im Sozialismus. *ibid.*

S. 231.

本的な溝が存在することもまた否定できないように思われる。ベルンシュタインにおいて「最終目標は無、運動が全て」と言われるとき、彼においてはなお、この運動の方向において比較的楽観的な展望を持つことができたのであるが、現代の社会主義理論は、将来に対する確固たる自信も展望も欠いたまま、なおかつ「最終目標は無、運動が全て」と言わねばならない状況におかれているからである。